

「立ち読み」コーナー用：本書の一部

本書の文章をそのままご覧になれます。

ただし、ほんの一部です。

こちらで、本書の雰囲気（ことばづかい、ルビ、さし絵など）をご確認ください。

なお、ここでは本体のスタイルを崩さざるをえませんでした。

(1) 本体の各章のタイトルページは、すべて、こちらの第1章のようになっています。彩色はちがいますが。

ただ、章のタイトルページをここですべてお見せしてもあまり意味がありませんので、第2章からは省略します。したがって、「これは第何章であるか」を赤字で該当箇所に記しました。

(2) 各節は、目次でもおわかりのとおり、通し番号です。本体では、節が変わるたびにページがあたらしくなるのですが、このコーナーでは、ページの途中からはじまることも生じています。

(3) 「飛ばしページ」の図は、もちろん本体にはありません。

第 1 章

はじめに何を 知っておくべきか？

(人間はみな、
同じ「頭のしくみ」をもっている)

1 「あした行くか？」 <フレームと欄^{らん}>

どこからか二人の話し声が聞こえてきたとします。ほんの出だしだけです。

A：あした行くか？

B：え？ どこへ？

A：新宿^{しんじゆく}。

B：何しに？

このわずかな会話に人間の頭のしくみが見えます。そのしくみを知っておくと、英語の勉強がぐっと楽になりますよ。

頭の中の枠^{わく}

とつぜん「行くか？」と聞かれれば、だれだって「どこへ？」とまっ先に聞き返したくなりますよね。[行く]は「どこかの場所に向かって動く」ということだから、場所のない[行く]はありえません。

場所がわかっても、だれだって「何しに？」「なんで？」とつづけて聞きますね。少しでも目的がなければ、人は動き出せませんからね。

「だれが、いつ、どこへ、何しに」の各項目^{こうもく}がまず埋^うまっではじめて[行く]の意味が実際に成り立ちます。何かが埋まっていないと、頭が落ちつきません。B君は、「え？」と声を出す一方で、どこかに行く話でも前にあったかと急いで頭の中を探したはずです。思い当たらないので、「どこへ、何しに」と聞き返すわけです。

話が進めば、「だれと？」も問うでしょう。「電車で？」「集合場所は？」「お金はいくらもっていく？」のような、まとめていえば「どのようにして？」もきっと話題になります。



「立ち読み」飛ばしページ

次は、第2章

3 電^{みち}車道の英語 <吸い寄せ型の欄順>

「Tom はきのう新宿で Bob と映画をみました」という文があったとしましょう（以下、「みました」は「みた」と書きます）。

英語にすると、次です。欄ごとに下線を引いておきましょう。中学一年生くらいの読者は、英語自体はまだまだ見ているだけでいいですよ。

Tom saw a movie with Bob in Shinjuku yesterday.
トム みた 映画 ボブと 新宿で きのう

「だれが」「何を」などの欄ごとに前から順に日本語を当てると、上にあるとおりです（「ボブと」「新宿で」に「と」「で」がありますが、‘with’ ‘in’ があるからです。助詞とはちがいますよ。あとで少し説明しますが、第5章で詳説^{しょうまつ}します。「映画 ‘movie’」の前に ‘a’ がありますが、これは第3章で）。

ふつうの日本語文の欄順と並べてみましょう。

これまでの英語の本では、一部の専門書をのぞき、ほとんど問題にされてこなかったテーマです。ここを理解すれば、日英はどれだけちがい、どれだけ似ているか、ということがわかります。日英語の類似点については、きっと日本初の情報でしょう。

次は、第3章

7 「この犬がほしい」 <英語の目(1): 指示語 + 名詞>

「犬」は ‘dog’ [dɒ(:)g] ですよね。だから、たとえば「私、犬がほしい」と言う場合、その「犬」はただ ‘dog’ とさえもいいんだろ？ と思ってしまいますよね。

ところが、ちがうんです。しかも、「私、犬が好き」になると、同じ「犬」でも、またちがうんです。

「犬」「車」「母」「事件」そのほか何でも、何かのものや人や

できごとなどのそういう一般的な呼び名（名称）は、「名詞」といいますよね。名詞を言うときには、日本語とはちがうルールがあります。それをこの章で見えていきます。

指示語＋もの（人）

トムとボブが実際に新宿の街を歩いているとしましょうか。ペットショップを見かけて、二人はそこに入ったとします。トムの家族は、犬を飼おうとしているのです（とくに弟が）。

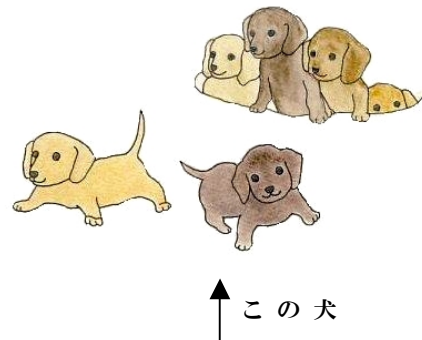
犬のコーナーを見ていて、トムが「この犬がほしいな」と言いました。これ、英語でどう言うか？

Aパターンで、主語は自分。だから、「ボク（I [ai])、ほしい（want [wánt])、この犬」の順で、“I want この犬。”です。

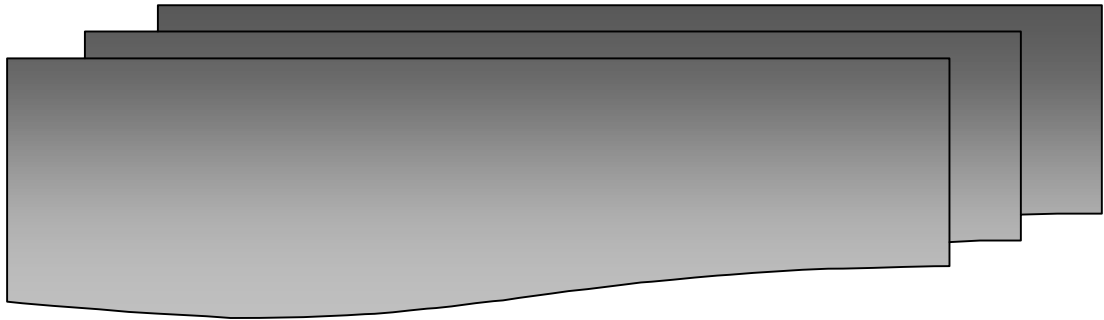
「この犬」の「この」と指さすことばは‘this [ðis]’。これに‘dog’をつづけて‘this dog’とすれば、「この犬」の意味になります。

なあんだ、日本語の言い方（しくみ）と同じじゃないか、ですね。

はい、この場合は同じです。トムは“I want **this dog.**”と言ったのです。



「この犬」と言われた犬は、「この」によって、たくさんいる犬の中のどれかに決まりましたよね。目を離しても、「顔」（姿・特徴）が目につかびます。いわば「顔の決まった犬」になりました。



「私、母が好き」(指示語に慣れよ)

だれかが「私、母が好きです」と言ったとします。

この「母」は、それを言った本人の母のことですね。「母」と呼ばれる人ならだれでもいいわけではありません。したがって、“I like **my** mother.”と言わなくてはダメですよ(好き = like [láik])。

注意：家の中か親しい人とのあいだでは、その「母」を ‘Mother’ ‘Mom [mám]’ と言うだけのこともあります。Tom などと同じ呼び名のように使います。書くと、先頭は大文字です。

日本語では、「だれの～」なのかが明らかなら、いちいち「私の～」などとは断りませんよね。「きのう、友だちがね、・・・」と話しはじめれば、自分の「友だち」のことであるのは明らかだから、「私の友だちがね、・・・」と言わなくても済んでしまいます。

ところが、英語では、きちんと断るのです。どれを指しているのかが明らかであるからこそ、「顔」が決まっていることをちゃんと断るのです。

「私、私の母が好き」ではくどいように思えますが、ここが日本語の感覚とはちがいます。「英語の目」です。

「指示語＋名詞」は日本語と同じしくみとはいえ、指示語を省く習慣にどっぷりつかっていると、うっかりしますよ。この「英語の目」には早めに慣れておくことです。

たとえば、次の(a)～(g)の日本語はごくふつうの言い方ですが、青い文字の部分は英語でどう言うでしょう？

- (a) (玄関で) こんにちは。お父さん(father [fá:ðɔ̃])いらっしゃいますか？
- (b) 彼は自分の妹がきらいなんだよ。
- (c) 暑いね。窓(window [wíndou])を開けていい？
- (d) 私、きのう、サイフ(wallet[wálit])をなくしちゃった。
- (e) (小さな子に) お名前(name [néim])は何ていうの？
- (f) トム？ 弟(brother [bráðɔ̃])とどっかへ行ったよ。
- (g) (食事中) ちょっと砂糖(sugar [júgɔ̃])を取って。

(b)以外、それぞれの名詞には指示語がありません。でも、どれもこれも決まったものを指しているはずですよ。指示語が必要です。上のことばが語られた場面を想像すれば、どの指示語が必要かがわかります。

(a) だれかが知人の家にやってきましたら、その息子さんでも玄関に出てきたとしましょうか。

「お父さんいらっしゃいますか」の「お父さん」はその息子さんの父親に決まっていますよね。「あなたのお父さん」です。日本人なら、日本語で「あなたのお父さんいらっしゃいますか」と言われると、キョトンとするでしょう。答=your father



8 「犬がほしい」 <英語の目(2)：冠詞^{かんし}＋名詞>

トムは、ペットショップで「ボク、この犬がほしい」と言ったのですが、もともとボブに「ボク、犬がほしい」と言っていたとしましょう。この二つの言い方はどこがちがうか？

見ればわかるように、「この犬」と「犬」のちがいだけです。ところが、この二つにはけっこう大きな差があるのです。

「顔」の決まらない「犬」

上の二つの差を理解するには、まず、次を見てください。日本語のほうを注意してくださいよ。



たとえば、次の会話は自然ですか？

① 二人でリンゴをいくつか買ってきた。

A：(ある一個を指して) このリンゴ、見て！

B：どのリンゴ？

② 道を歩いていたら、サイフが一つ落ちていた。

X : あんなところにサイフが落ちてるぞ！

Y : どのサイフ？

① は自然ですね。

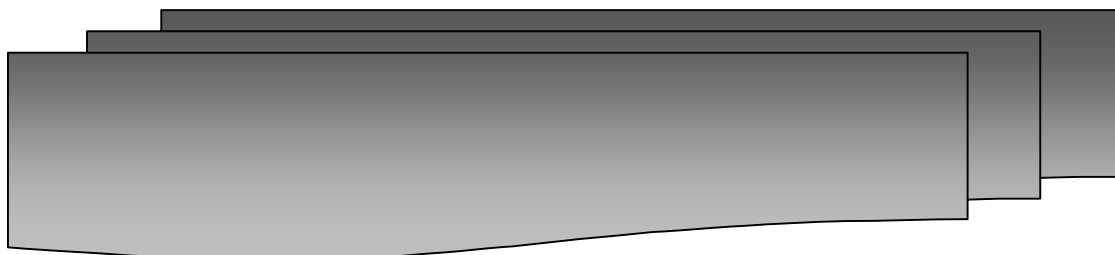
A は、どれか一つのリンゴを他と区別して「顔」を決めています。B は、A の指したものがどれなのかがわからなければ、「どのリンゴ？」と聞き返しますよね。当たり前です。

「この」「私の」などの指示語は、もともと、「どの～？」「だれの～？」という問いが基もとにあって、それに答えて「この」などと言っているわけです。

つまり、「どの？」欄を具体的に埋めたことばが指示語、というわけです。だから、どれなのかわからなければ、「どのリンゴ？」などと聞き返すことができるのです。

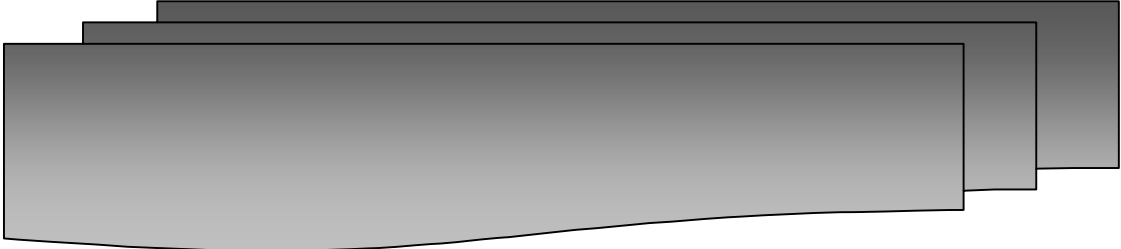
② は、ヘンですね。

X は、「あのサイフ」「彼のサイフ」などと、「顔」の決まった



「私、母が好き」:「私には母はいない」

‘a’ の使い方の基本をおさえておきましょう。いくつか例を挙げていきます。



「大きなリンゴだな」

少し練習しておきましょう。ここを通過すれば、英語が一段いちだんとわかったことになります。

次の青い文字の部分は英語でどう言うのでしょうか？ 適切な指示語か ‘a’ を使いますよ。

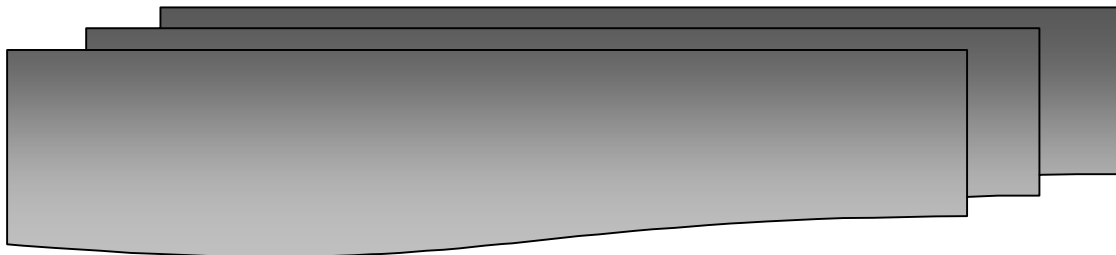
- ① 私の父は 医者 (doctor [dákɾə]) です。
- ② (部屋の中で) いまだれか ドア (door [dɔə]) をノックしたぞ。開けてみろよ。
- ③ これは、ピアノだよ
- ④ (小さな子に) こぼすでしょ。ちゃんと 手 (hands [hándz]) で コップ (glass [glæs]) をもって！
- ⑤ この赤ちゃん (baby [béibi]) は 男の子 (boy [bái]) よ。
- ⑥ これ、大きなリンゴ (big apple [bíg] [æpl]) ですね。



日本語のほうが複雑

次に来る音によって ‘a’ か ‘an’ を使い分ける、というのはめんどろうですよね。しかし、日本語のほうがもっとややこし

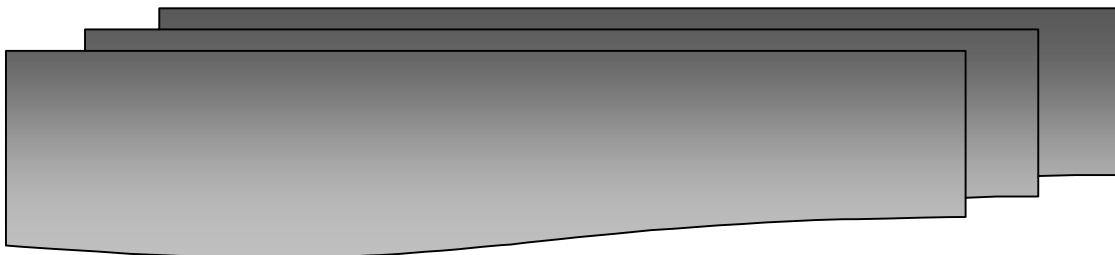
いことをやってのけているんですよ。



「a (an) + 名詞」の形は、実際に名詞を言うときの約 21.7% を占めています。「指示語 + 名詞」が約 54% でしたので、合計で約 75% 強になります。名詞を言う場合のほとんどが、指示語か ‘a (an)’ の前置きをつける、ということです。

なお、とうぜんのことですが、この二種類の前置きは両立しません。‘my a dog’ ‘a this pen’ などとは言えませんよ。

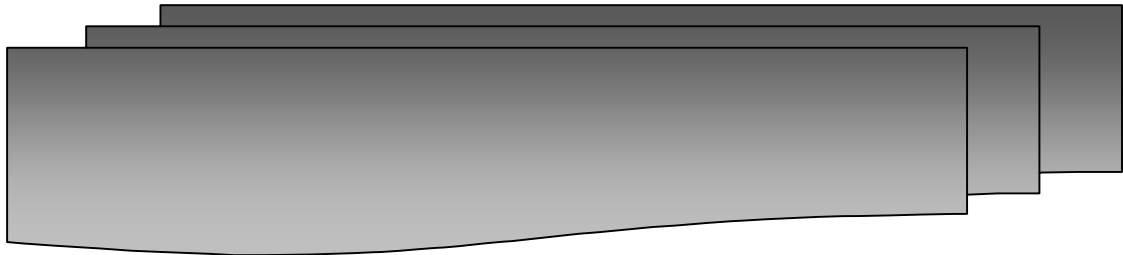
9 「犬が二匹」 <英語の目(3): two dogs>



「メルボルン事件」といわれる「日本人旅行者へロイン^{みつゆ}密輸事件」があります。裁判における通訳者の通訳がひどかったよ

うで、^{えんざい}冤罪事件として有名です。「スーツケース」は一つだったのか、そうではなかったのか、という問題もかかわっていたようです。何かで調べてみてください。

おや？　いま「日本人旅行者」といいましたよね。一人だったのでしょうか？　この日本語ではわかりませんね。英語では



「英語の目」：練習問題

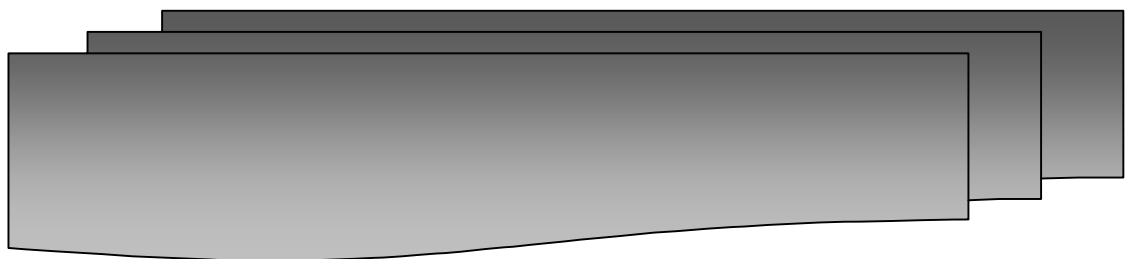
整理の意味をかねて、練習問題を少し。

次の青い文字部分は英語でどう言うのでしょうか？

- ① 見てみろ！ 屋根の上に犬がいる。
- ② 彼は大きな石を腕にかかえた。
石 = stone [stóun]、腕 = arm [áɾm]
- ③ 新しいエンピツがほしいな。エンピツ = pencil [pénsɪ]
- ④ 切手を集めるのって、おもしろい？ 切手 = stamp [stæmp]
- ⑤ 木はたいせつにしましょう。木 = tree [trí:]
- ⑥ 彼女に eメールを送り忘れた。eメール = e-mail [í:mèil]
- ⑦ ボクはマンガが好きです。マンガ = comic [kámik]
- ⑧ (食後に) コーヒーでもいかがですか？
- ⑨ 正直がいちばんいい。(正直 = honesty [ánisti(:)])
- ⑩ 彼は 正直な男の子だ。(正直な = honest [ánist])

- ⑪ 月も好きだが、星はもっと好き。(星 = star [stáɹ])
- ⑫ このテーブルは石でできている。テーブル = table [téibl]
- ⑬ 私はバスで通っています。(バス = bus [bás])
- ⑭ きのう、母が亡なくなりました。

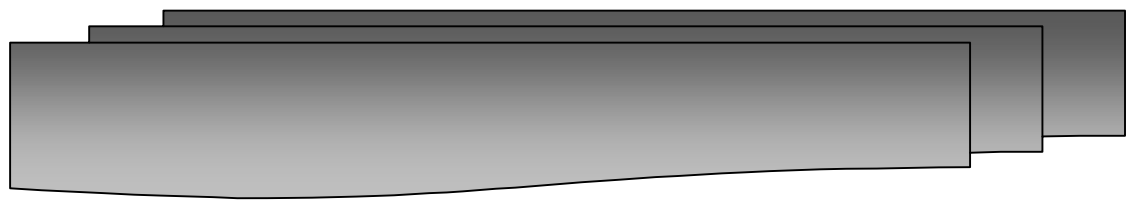
⑪の「屋根」は、互いにすでにわかりあっている屋根ではなく、いま指さした「あの屋根」(that roof)、「犬」は‘a dog’でしょう。何匹かいるなら‘some dogs’です。



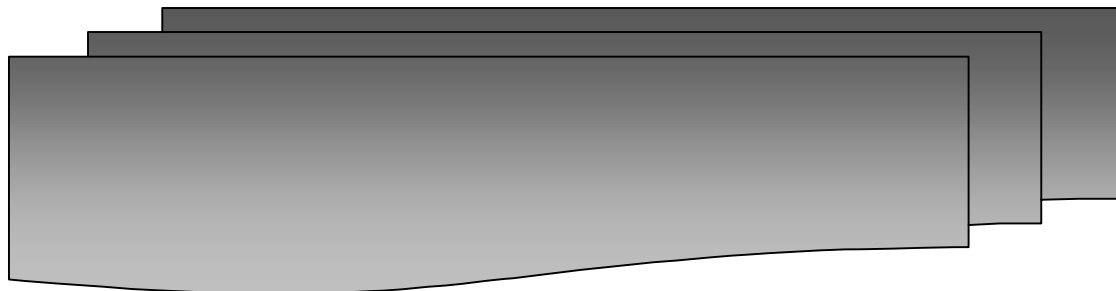
次は、第4章

13 日本語にも「三単現の‘s’」はあるか？

< s 形ルール > は、一般には、「三単現の‘^{エス}s’」と呼ばれています。「主語が三人称で単数の場合、動詞の現在形には‘s’がつく」と説明されています。< s 形ルール > と同じです。



第三者が主語になると、日本語にも<主語 - 動詞>の関係にある程度のルールがあります。それを見ておきます（日英にかぎらず、同じようなことはほとんどの言語に見られます。他の外国語については何かで調べてみてください）。



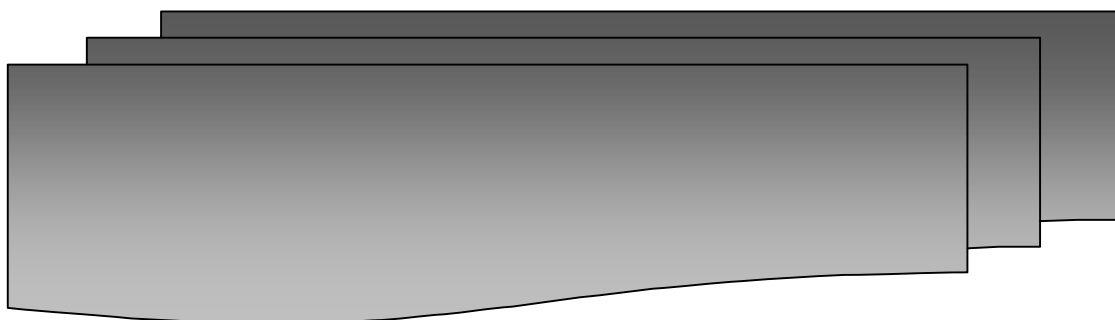
ところで、英語のネイティブスピーカーは、過去形をかんとんに覚えてしまうのでしょうか。Johnの話を見てみましょう。

【John's Report】

The Troublesome Past Tense

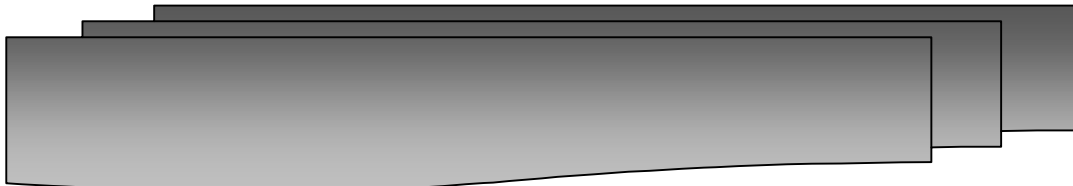
.....略.....

Children in the playground at my son's elementary school make many past tense mistakes. I have heard children make mistakes with the past tense of 'go.'



次は、第5章

18 「東京に住んでいる」 <「どこ」欄：位置語>



英語の目：動詞のような前置詞（位置語）

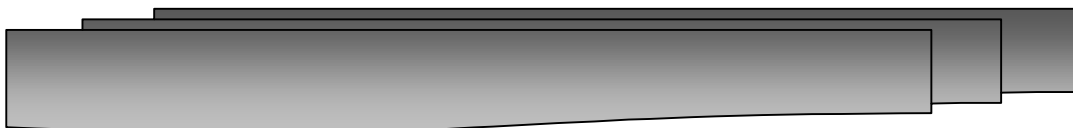
日本語は、場所を言うとき、何でも「～に」「～で」「～へ」で済ませてしまいます。内容によって位置関係が異なることはわかっているのですが、それを区別してあらわす単純なことばがありません。

英語は、前置詞ひと言でそれが区別できるのです。

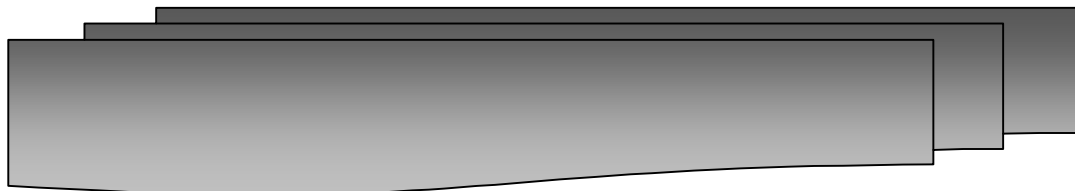
前置詞は、「東京」「机」「イス」その他、何かの名詞を必ずうしろに置きます。名詞を置かなければ使えない、という性質のことばです。そこから「前置詞」と呼ばれているのです。

なるほど、形式としては「前置」詞です。でも、働きとしては、位置関係のようすを「～に包まれている」「くっついている」などと「動詞」のように描写するのです。

だから、位置関係を的確てきかくに区別してあらわす「位置語」、と考えたほうがわかりやすくなるでしょう。これからときどき、そう呼びます。



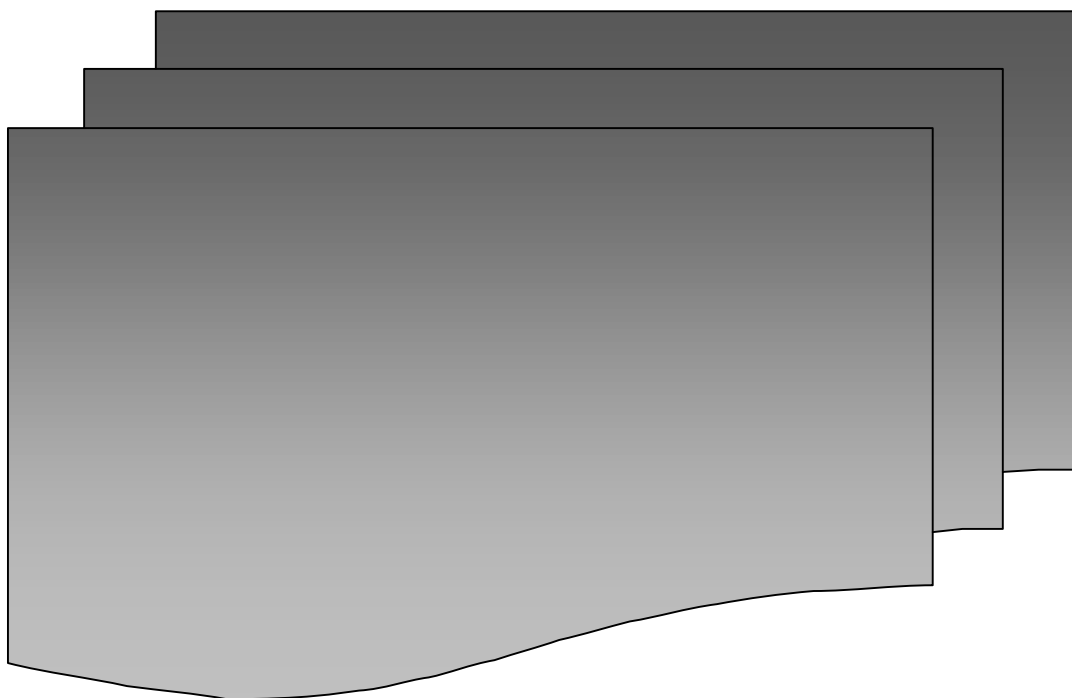
前置詞を「位置語」ととらえれば、欄を超えて、いろいろな
ようすが表現できます。位置語の威力です。



トムは、車をもっていて、ときどき車で学校に通っている、
としましょう。

この「車で」は ‘by car’ でしたね。“Tom goes to school by
car.” です。どうして ‘by’ か？

さきほど、‘by’ は「～のそばにいる」という位置関係をあ
らわしましたよね。「弟は学校のそばにいる」の例で、です。



21 「一体」の連結器 <どこでも‘of’>

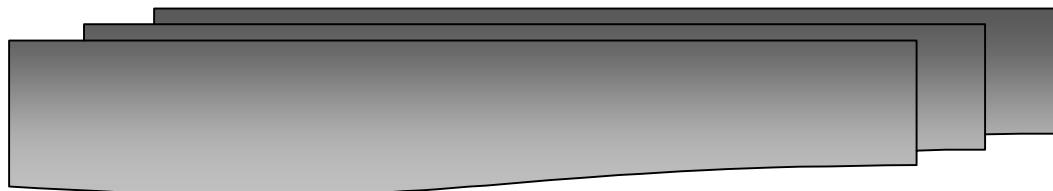
最後の9語目は‘of [əv]’です。

これまで何度か‘of’が出てきました。

「友だちの一人」は‘one of my friends’、「リンゴがたくさん」は‘a lot of apples’、「コーヒー一杯」は‘a cup of coffee’でした。

いつも「X of Y」の形でした。「X」も「Y」も名詞です。前に軽く述べたように、この二つの名詞を^{いったい}一体にするのが‘of’の役目です。上の例のような「数量」を言う場合だけではありません。

この「一体」とはいったい何か？



第6章は、すっかり飛ばします。

次は、第7章

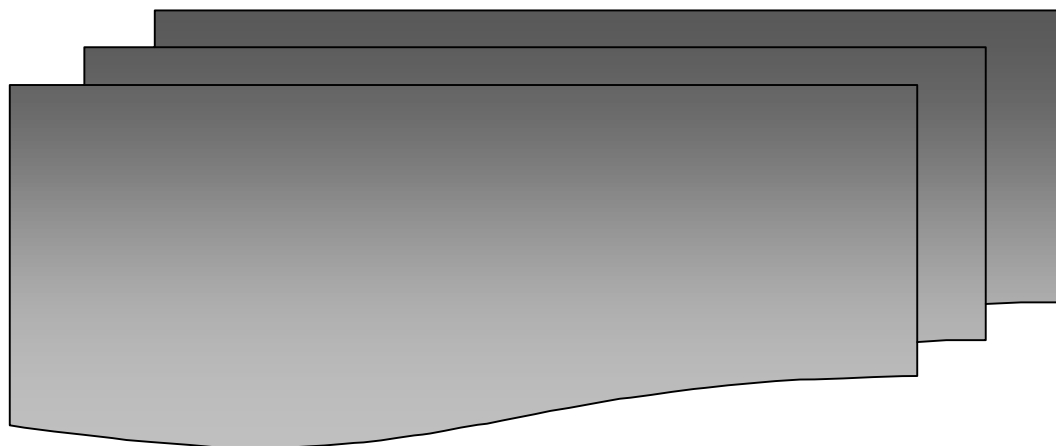
「助動詞」というより、「ジャッジ語」

主語が第三者でも、‘will_s ~’にはなりませんでしたね。

この‘will’は、一般に「助動詞」と呼ばれ、「助動詞は、主語が何であれ、‘s’はつかない」とよく説明されます。

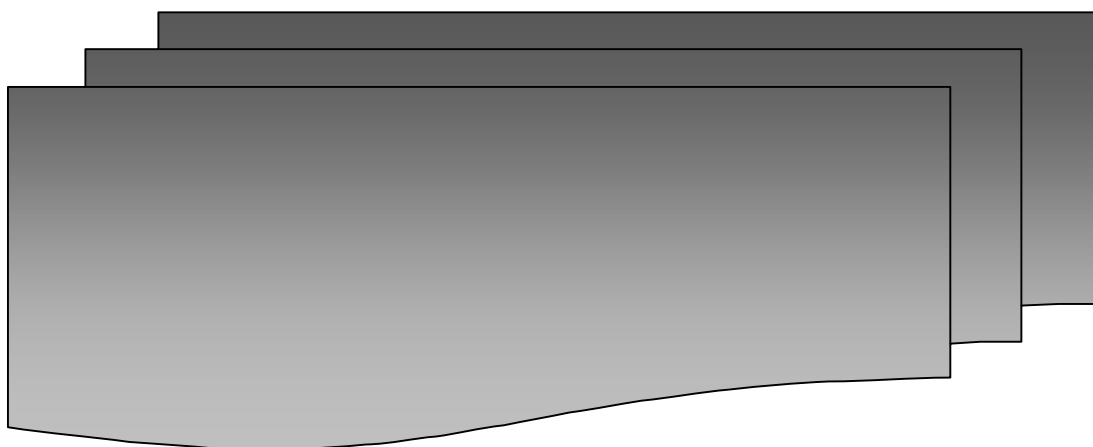
でもね、進行形で使われた‘be’動詞も一般には「助動詞」といわれますが、<s形ルール>にしたがってしまいましたね。あとで出てくる「助動詞」の‘do’も<s形ルール>にしたがいます。

「‘will’は助動詞だから」という考えはまずいですね。



次は、第8章

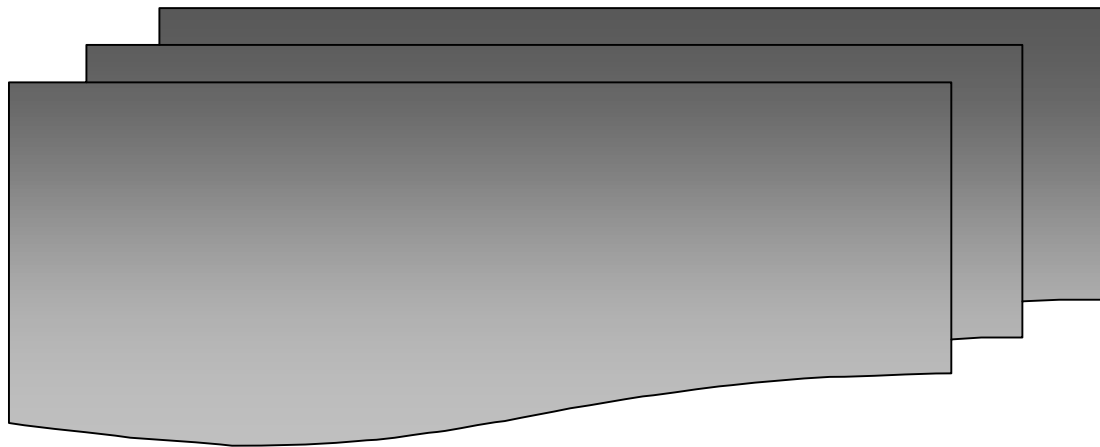
30 「トムが殴られた」 <受け身の言い方>



補足：「トムが知らない人にに殴られた」と言う場合は、“Tom was attacked by a strange man.”です。「殴る - 殴られる」という主従の関係では、殴った側（知らない人）が主ですね。だから、‘by a strange man’です。「車で、バスで」が‘by car (bus)’になるのと同じですよ。

「受け身」には必ず‘by ~’がつく、と思い込んでいる人がいますが、それは誤解ごかいですよ。主従の関係の主（やった側）を言う場合だけのことです。ケースにもよりますが、平均的にいえば、受け身の文の二割にも満ちません。

次は、第9章



英文法の本を見ると、「現在完了には、経験、はいそく継続、結果、完了の四種類がある」という説明によく出会います。

たいてい、それぞれ「～したことがある」（経験）、「ずっと～している」（継続）、「～してしまった」（結果）、「～したところだ」（完了）、という日本語が当てられています。

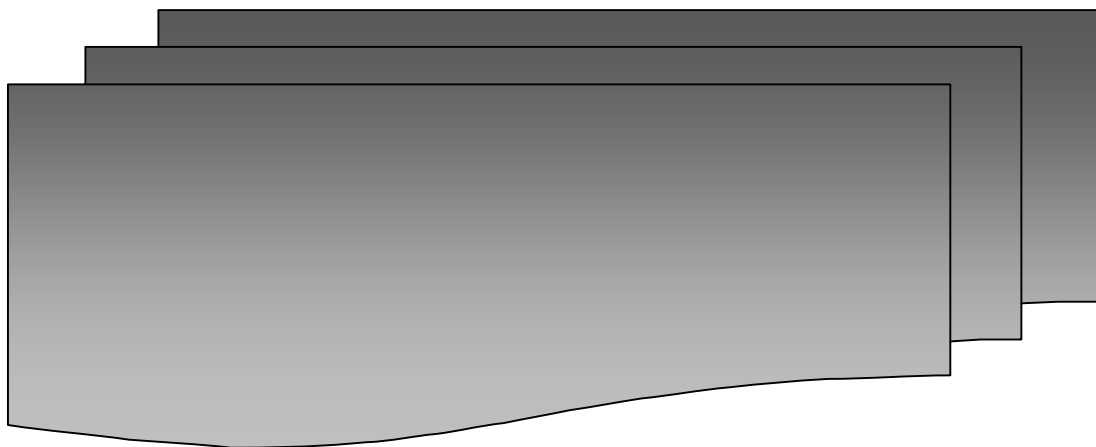
ところが、「四種類」に慣れてしまうと、かえって不自由なことになると思います。大学生になっても、上の四通りの日本語以外では英語の現在完了が使いません。

たとえば、「もう何度も言ってるよ」は、四つのどれ？ どれでもないから、英語は、過去形？ 現在形？ 現在進行形？

基本をまず一つおさえることです。そこに収まりきらないものは、日英の差として、特別に注意すればいいのです。

いまの四つも、「基本をいじれば、そうも言えるかな」くらいに見ておけばいいのではありませんか？

④以降の例文をさっきの「基本」にしたがって日本語で見てください。



次は、第 10 章

35 「これ、ほしい？」 <何かを問う言い方>

翌日、ボブがトムに夢の話をしようとするのですが、トムは

別のことが気になっているようです。「メアリーが来年オーストラリアに行くって、知ってるか？」

「～を知っているか？」の形は、一般に「疑問文」といわれています。ようやく、この本に登場です。

「疑問文」のしくみは、落ちついて考えなければいけません。けっこうむずかしいんですよ。文の基本がよくわかってからでないと、混乱しかねません。だから、この本では最後のほうにしたのです。

それに、「疑問文」という用語もいけません。「疑問」といっても、「疑^{うたが}う」というより、「尋^{たず}ねる」「問う」という意味にすぎないのです。この本では、「問い」と呼ぶことにします。「問い」ではない文（一般にいう「平叙文^{へいじょぶん}」）は、「言い切り（の文）」としましょう。

「これ、ほしい？」というかんたんな文からはじめます。

文末はなぜ上がる？

日本語の「これ、ほしい？」は、声に出すと、最後の音が上向き（ほしい ↗）になりますね。相手に何かを問うとき、特に「はい（yes [jés])、いいえ（no）」の答を求める場合、文末の音を上げるのは、人間のほとんどに共通したことのようです*。

※世界には 6000 種類以上の言語がある、といわれています。すべてがどうなっているかは、わかりません。よく知られている言語の多くは、文末が上がるようです。三省堂『言語学大辞典（世界言語編）』などを参照されたい。

「これ、ほしい？」は、問いでなければ、“You want this.”

です。この文末の音を上げると、日本語と同じく、「問い」になります（ピリオドは「？」に代えること）。

You want this? (this ↗)

「問い」は、なぜ文末の音が上がるのか？

ここから「疑問文」の核心に入っていきます。Do がなぜ使われるか、それをどう理解するいいか、という問題がわかってから、ようやく be 動詞の「疑問文」です。

次は、第 11 章

比較級を使った文には than がつきもの、と思っている人が少なくありません。比較級の基本を知らないといけません。基本がわかると、高校レベルの英語もかんたんに見えてきます。

高校レベルの英語ですが、“I have no more than a thousand yen.” のような文を苦手にする人が多いようです（a thousand yen [θáuznd] [jén] = 千円）。

ここで ‘no more’ の基本説明。

もう一つ。受験界で有名な「クジラ（whale [(h)wéil]）は、馬と同様、魚ではない」という高校生泣かせの文があります。“A whale is no more a fish than a horse is.” です。

あまりに奇妙な文で、日本語でも英語でも、こんな文はだれも言いませんよ。この本でこれを扱うと、こんな文がまたまた生き延びてしまって、よろしくないのですが、でも、高校生のためにちょっと一言。

形容詞の最上級には the がつくが、副詞の最上級には the がつかないのはなぜ？

次は、第 12 章（最終章）

42 文の変形 < A パターンの骨格の変形 >

Mary: I'm not going to Australia. Who said that?

Tom: One of my classmates. (classmate [kælsméit] = 級友)

I will tell him that. It will make him happy.

文の変形（何が、する、だれに、何を）

A パターンの文は、「何が、する、何を」が骨格でしたね。

上の “I'm not going to Australia.”（あとでまとめるために、これを i とする）は「何を」欄がありません。「私、行かない」のあとは「どこ」欄です。

“Who said that?”（ii）は、「だれが、言った、そのこと」だから、骨格がそろっています。

ところが、“I will tell him that.”（iii）は、「ボク、伝える」のあとが「彼、そのこと」となっています。常識的に考えて、「彼にそのことを伝えよう」ですよ。そうすると、「何を」欄（そのこと）の前に「だれに」（彼に）という欄が入り込んでいる、ということになります。

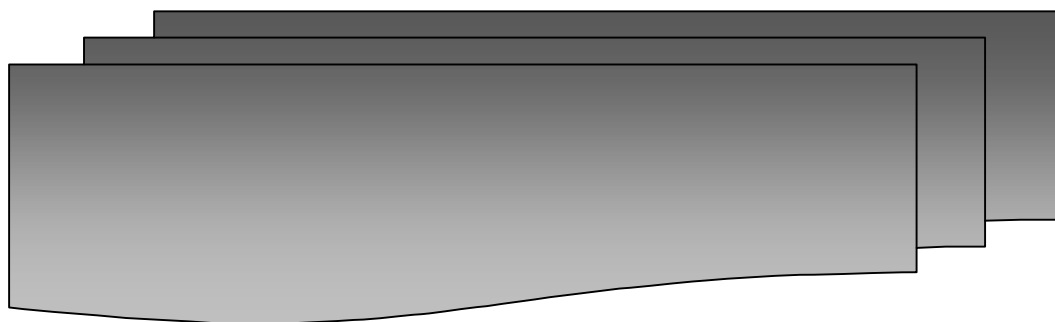
「伝える」「あげる」「尋ねる」「教える」「見せる」「送る」「売る」などは、「……、何を、だれに」とつづくフレームを作ることがありますね。

その場合、これまでは、「だれに」欄を骨格のうしろに置いて、‘to + だれ’（「買ってあげる」などは ‘for + だれ’）としてきました。

たとえば、“I will teach English to your students.” のように、です。

この ‘to (for) + だれ’ は、骨格から切り離されているので、「だれ」のところがかえって目立つ言い方なのです。「英語を教えるって、だれに？」という感じですよ。

上の iii の例は、「彼に」伝えるということが話の流れでわかりきっていますよね。だから、



「立ち読み」終了